

本発表は、事実条件を表す「たら」と「-essteni」の類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。従来の研究では、両形式の共通点への言及は見られるが、相違点への言及はほとんど見られない。しかし分析の結果、話し手が、前件の事態の成立がきっかけで後件の事態を新たに認識したことを表す点では類似するが、事実条件を表す「たら」の前件は後件の事態を新たに認識した状況を表すのに対し、「-essteni」の前件は後件の事態を新たに認識したきっかけを表す点と、新たに認識した事態を後件に表す際、事実条件を表す「たら」は、話し手が事態を開始から把握しているか否かによって、後件述語のアスペクト形式が選択されるのに対し、「-essteni」は、話し手が事態を全体的に把握しているか、部分的に把握しているかによって、後件述語のアスペクト形式が選択されるという点で相違があることがわかった。

1. はじめに

現代日本語において条件を表す形式である「たら」は、現代韓国語と対照すると、主に「-myen」と対応する。しかし、現代日本語の条件を表す「たら」には、前件と後件の事態が既に起こった一回限りの事態である「事実条件」を表す場合もあるが、このような環境では「-myen」とは対応することができず、現代韓国語において条件を表す形式とされていない「-essteni」と対応することがある。このような点に注目し、対照研究を行った従来の研究では、事実条件を表す「たら」と「-essteni」の対応様相を確認したり、両形式の共通点を明らかにしようと試みたりしている。しかし、その多くが両形式の共通点のみに注目しており、対応関係をなさない場合についての言及はほとんど見つからない。このような現状から、本発表は、事実条件を表す「たら」と「-essteni」の類似点と相違点を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究及びその問題点

事実条件を表す「たら」と「-essteni」を対照分析した先行研究に、安平鎬（2005）を挙げることができる。安平鎬（2005）は、事実条件を表す「たら」と「-essteni」のそれぞれに含まれている「タ」と「-ess-」がともにパーフェクト性を有しているため、前件は後件の事態を発見するきっかけとなる「場」を提示する機能を有する点で共通するとしている。また、「タ」と「-ess-」は通時的にも存在型アスペクト形式から存在動詞が文法化して成立したという点でも共通するとしている。一方、事実条件を表す「たら」の意味・用法をいくつかに分け、それぞれの意味・用法において現代韓国語のどのような形式と対応するかを確認した研究においても「たら」と「-essteni」の関係への言及が見られる（Song 2006、八野 2008、Kim 2013 など）。これらの研究も事実条件を表す「たら」と「-essteni」の共通点に注目しており、Kim（2013 : 41）は「「-essteni」が話し手が直接経験した話し手の知覚や発見を表す場合に頻繁に使用されるという点と、事実条件を表す「たら」の話し手が直接経験した話し手の新しい事態を認識する用法に主に使用され、客観的に事態を叙述する文脈ではあまり使用されない点で互いに類似している」と述べている。しかし、事実条件を表す「たら」と「-essteni」が対応関係をなさない場合もあるが、両形式の相違点に言及した先行研究は、管見の限り見当たらない。このような点を踏まえ、本発表では、小説

や漫画とその翻訳を資料とし、事実条件を表す「たら」と「-essteni」が対応関係をなす場合と、対応関係をなさない場合を中心に、両形式の類似点と相違点を明らかにし、さらに両形式の使用条件についても考えたい。

3. 事実条件を表す「たら」と「-essteni」の類似点と相違点

ここでは、事実条件を表す「たら」と「-essteni」が用いられた用例を中心に、両形式が対応関係をなす場合となさない場合を確認し、そこからわかる内容を踏まえ、両形式の使用条件について考えることにする。

3.1. 事実条件を表す「たら」と「-essteni」がともに自然な場合

まずはじめに、事実条件を表す「たら」と「-essteni」が対応関係をなす例文として、以下のようなものがある。

- (1) a. 「どうしたのって訊いたら、別に何でもないので」 (ナミヤ : 148)
b. “weynilinyako mwulepw-assteni kunyang pyelil anilakoman hasinun keya” (namiya : 175)
- (2) a. 「幼稚園でバーベキュー大会があったときも、園長先生が舞ちゃんに肉を焼かせたら、血相を変えて飛んできて、火傷したらどうするんだって園長先生にくっつかかって、気まずい雰囲気になったこともあります」 (無痛 : 129)
b. “yuchiweneyse papikhyu tayhoyka issessul ttayto, wencang sensayngnimi maieykey kokilul kwuwulako sikhy-essteni acwu phelphel ttwimyense hwasangilato ipumyen ettehkey hal ken-yako ttaciko tulese, pwunwikika elmana esaykhaycyessnunteyyo” (mwuthong : 175)
- (3) a. 前の晩、社内懇親会があり、気の置けない同期たちと久しぶりに会ってアルコールを口にしたら、なにやら張っていたものが緩んで飲み過ぎてしまった。 (ナオミ : 156)
b. cennal pam, sanay chinmokhoyka issese pwutamsulepci anhun tongkitulkwa olaynmaney alkhooolul ipey tay-ssteni, cayensulepkey kutonganuy kincangi phwullye kwaha-key masiko malassta. (naomi : 175)
- (4) a. 緊張が解けたら、お腹がすいた。
b. kincangi phwully-essteni payka kophuta. (以上、作例)
- (5) a. 「店のほうで物音がしたから様子を見に行ったら、郵便用の小窓の下にこれが落ちてた」 (ナミヤ : 29)
b. “kakey ccokeyse solika nase kapw-assteni wuphyenham mithey ikey ttelecye issesse” (namiya : 36)

(1) から (5) は、話し手が前件の事態の成立がきっかけで、後件の事態を新たに認識したことを表している。例えば、(1) (2) は前件の主体の行為がきっかけで、後件の主体が反応したことを、(3) は前件の行為がきっかけで、状態変化が起こったことを新たに認識したことを、(4) は前件の状態変化がきっかけで、後件の状態変化を認識したことを、(5) は前件の行為がきっかけで、後件の状態を発見したことをそれぞれ表している。なお、いずれも後件の事態は話し手の意志ではコントロールができない事態を表しており、以下のように後件に話し手の意志でコントロールできる事態が表されると、事実条

件を表す「たら」と「-essteni」がともに不自然になる。これは、後件は話し手が事前に計画した事態は表すことができず、話し手が新たに認識した事態のみを表すということを意味する（蓮沼 1993、有田 1999、前田 2009、Lee 2011、Song 2014 など）。

- (6) a. ? 私はアルコールを口にしたら、お水を飲んだ。
 b. ? nanun alkhooolul ipey tay-ssteni mwulul masyessta. (以上、作例)
- (7) a. ? 太郎がアルコールを口にしたら、私はお水を飲んだ。
 b. ? thaloka alkhooley ipul tay-ssteni nanun mwulul masyessta. (以上、作例)

一方、前件が話し手の思考行為を表し、後件が話し手が新たに認識した事態を表す場合にも、両形式はともに自然に用いられる。

- (8) a. この前のストレートパーマが気に入らなかったのかと思ったら、今度は髪を染めたいと言う。
 (生姜 : 213)
 b. cinanpen suthuleyithuphamaka maumey an tulese on cwul al-assteni yemsaykul hakeysstako hanta.
 (sayngkang : 171)
- (9) a. 「ここ数年、会ってなかったので、急にどうしたんだろうと思ったら、展覧会のあと、喫茶店で新聞のコピーを渡されたんです」
 (無痛 : 127)
 b. “myech nyen tongan mannacito anhassnuntey mwusun palami pwulesna hayssteni, censihoyslul poko nanikka khapheyeyse sinmwun poksahan kel nanwe cwutelakoyo” (mwuthong : 173)

(8) は話し手が前件の事態が事実であると予想したが、後件に表される事態が事実であることを新たに認識したことを表しており、(9) は話し手が疑問を抱いたが、その疑問への回答となる後件の事態を新たに認識したことを表している。すなわち、前件が話し手の思考行為を表す場合も、話し手が予想や疑問を抱いたことをきっかけとし、後件の事態が自分が予想した事実と異なることや疑問に思ったことへの回答を新たに認識したという点から、前件の事態の成立をきっかけに、後件に表される事態を新たに認識したことを表していると言える。

このように、話し手が、前件の事態の成立がきっかけで、後件の事態を新たに認識したことを表す場合、事実条件を表す「たら」と「-essteni」はともに自然に用いられる。

3.2. 事実条件を表す「たら」は自然、「-essteni」は不自然な場合

しかしながら、事実条件を表す「たら」は自然に用いられるのに対し、「-essteni」は不自然な場合がある。

- (10) a. 二階の部屋で着替えをしていたら、窓の下で物音がした。
 (ナミヤ : 145)
 b. i chung pangeyse osul {kalaipko issnuntey/?kalaipko iss-essteni} changmwun pakkeyse mwusun solika nassta. (namiya : 172)
- (11) (殺人現場で警察の人が複数の容疑者から話を聞いて)
 a. 「鴻江さんが 2 人を倉庫へ連れて行き...倉庫の入口のところで店主を呼んだが返事がなく...

2 人を倉庫に残して山田さんと伴場さんの所へ戻り、店主の居場所を思案していたら...倉庫で待っていたあなた方が倉庫の奥で店主の遺体を発見した...」 (コナン 88)

- b. “khowunoey ssika twu salamul changkolo teyllye kassnuntey... changko ipkwu ccokeyse onelulpwulle pwato taytapi epse... twu salamul changkoey namkyetwuko yamata ssiwa pampa ssika issnun kosulo tolaka oneka eti issnunci kwunglihako {isstten cwung/?iss-essteni}... changkoeyse kitaliten yelepwni changko anccokeyse oneuy sisinul palkyenhayssta...” (khonan 88)

(10) (11) は、前件の事態の成立がきっかけで後件の事態を新たに認識したとは考えにくく、単に前件の事態が起こっている最中に、後件の事態が起こったことを表している。例えば、(10) は二階の部屋で着替えをしている最中に、偶然窓の下で物音がしたことを表しており、(11) も鴻江、山田、伴場という三名の人物が店主の居場所を思案している最中に、偶然倉庫にいた二名が倉庫の奥で店主の遺体を発見したことを表している。いずれも前件の事態の成立がきっかけで後件の事態を新たに認識したとは考えにくく、前件は後件の事態が起こった際の時間的状況を表しているに過ぎないと言える。ただし、これまでの例文とは異なり、前件の述語に「していたら (-ko issessteni)」が用いられていることが原因で「-essteni」が不自然であるように思われる可能性がある。だが、以下のように、前件の述語に「していたら (-ko issessteni)」が用いられても、前件の事態の成立がきっかけで後件の事態を新たに認識したことを表す場合、「-essteni」は自然である。

- (12) a. 「本当はダメなんだけど、ドアの隙間から必死で覗いていたら、看護婦さんが、特別ですよ、って中に入れてくれたの」 (母性 : 26)
- b. “wenlaynun an toynuntey, mwunthumulo kilul ssuko tulyetapoko {issunikka/iss-essteni} kanhosaka thukpyelhi anulo tulyeponaycwesstanta” (moseng : 28)
- (13) a. 吸い込まれるように見つめていたら、男が怪訝そうに直美を一瞥した。 (ナオミ : 63)
- b. ppallyetunun keschelem {palapoko isscani/palapoko iss-essteni} namcaka isanghatanun tus naomilul hulkkiskelyessta. (naomi : 74)

(12) (13) はいずれも前件の事態がきっかけで後件の事態が起こったことを表している。例えば、(12) において看護婦さんが話し手を特別に中に入れたのは、話し手が必死で中を覗いていたためであり、(13) においても男が怪訝そうに直美を一瞥したのは、直美が男を見つめていたためである。

以上のように、「-essteni」は、前件が単に後件の事態が起こった際の時間的状況を表す場合、その使用が不自然になる。それに対し、事実条件を表す「たら」には、そのような制約が見られない。

3.3. 「-essteni」は自然、事実条件を表す「たら」は不自然な場合

一方、例文数は多くはないものの、「-essteni」は自然であるのに対し、事実条件を表す「たら」は不自然な場合もある。

- (14) a. 「昨日アロンサテを {出さなかったから/?出さなかったたら} こんな形で報復しているんだ」 (食客 3 : 21)
- b. “ecey alongsathaylul naynohci anh-assteni ilen sikulo popokhako isse” (sikkayk 3 : 34)

(15) (娘自身が食べるために買ったアイスクリームを、娘の不在時に父が食べ、後からそのことに気が付いた娘が腹を立てている)

a. ?「娘のアイスクリームを食べたら、(娘が) 怒っている」

b. “ttali san aisukhulimul mek-essteni, (ttali) hwalul nayko isse” (以上、作例)

(14) は、アロンサテを出してくれという客の要求をレストランの店員が断ると、翌日、アロンサテを要求していた客が再びレストランに来店し、騒ぎ散らしている場面での店員の発話であり、(15) は、父親が娘のアイスクリームを食べると、それに気が付いた娘が怒っている場面での父親の発話である。いずれも話し手は後件の事態を部分的に把握しており、後件の述語に非完結相 (imperfective) が用いられている点では (4) と類似するが、(4) は話し手が後件の事態が起こっている最中から把握しているのに対し、(14) (15) は前件の事態が原因で後件の事態が起こっており、話し手は後件の事態が起こった時点から把握している点で異なる。すなわち、話し手が起こった時点から把握している事態を後件に非完結相を用いて表す場合、事実条件を表す「たら」は不自然になると言える。話し手が後件の事態が起こった時点から把握している場合、事実条件を表す「たら」を用いるためには、以下のように、後件の述語に完結相 (perfective) を用いる必要がある。

(16) 「昨日アロンサテを出さなかったらこんな形で報復した」 (作例)

(17) 「娘のアイスクリームを食べたら、(娘が) 怒った」 (作例)

一方、「-essteni」にはこのような制約が見られず、話し手が後件の事態が起こった時点から把握している場合も、最中から把握している場合も、後件の述語に非完結相 (「-ko iss-」) が自然に用いられる。このことから、「-essteni」は話し手が後件の事態をどの時点から把握しているかは問題にせず、単に後件事態を部分的に把握している場合、非完結相と共起すると言えよう。

以上のように、事実条件を表す「たら」は、話し手が起こった時点から把握している事態を後件に非完結相を用いて表す場合、その使用は不自然になる。それに対し、「-essteni」にはそのような制約が見られない。

3.4. 事実条件を表す「たら」と「-essteni」の使用条件

ここまで、事実条件を表す「たら」と「-essteni」は、話し手が、前件の事態の成立がきっかけで、後件の事態を新たに認識したことを表す点において類似するが、前件の事態の成立がきっかけで後件の事態を新たに認識したとは考えにくく、前件が単に後件の事態が起こった際の時間的状況を表す場合、「-essteni」は不自然である点と、話し手が起こった時点から把握している事態を後件に非完結相を用いて表す場合、事実条件を表す「たら」は不自然である点で相違があることがわかった。このような類似点と相違点は、両形式の使用条件が異なることを意味する。以下では、事実条件を表す「たら」と「-essteni」の相違点についてさらに考えつつ、両形式の使用条件について考えることにする。

まず、事実条件を表す「たら」は、話し手が、前件の事態の成立がきっかけで後件の事態を新たに認識したということを表す場合と、前件が単に後件の事態が起こった際の時間的状況を表す場合のどちらにおいてもともに自然に用いられた。これは、事実条件を表す「たら」の使用において前件の事態の成立が後件の事態を新たに認識するきっかけとして機能しているか否かはそれほど重要ではなく、単に前

件が後件の事態を新たに認識した際の何らかの状況を表せば、自然に用いられることを意味すると言える。それに対し、「-essteni」は、前件が単に後件の事態が起こった際の時間的状況を表す場合は不自然であった。これは、「-essteni」の前件は話し手が後件の事態を認識するきっかけを表す場合にのみ、自然に用いられることを意味すると言える。

次に、話し手が新たに認識した事態を後件に表すにあたっても事実条件を表す「たら」と「-essteni」に相違が見られた。事実条件を表す「たら」は、話し手が起こった時点から把握している事態を非完結相を用いて表すと不自然であり、このような場合、完結相を用いて表す必要があった。だが、(4)のように、話し手が起こっている最中から把握している事態を後件に表す場合には、非完結相が自然に用いられることから、話し手が事態の開始を把握しているか否かが後件述語のアスペクト形式の選択において重要であると言える。それに対し、「-essteni」は、話し手が起こった時点から把握している事態を非完結相を用いて表しても自然であった。だが、完結相が用いられている(1)(2)(3)と非完結相が用いられている(4)(14)(15)を比較してみると、前者は話し手が後件の事態を全体的に把握しているのに対し、後者は部分的に把握していることがわかる。このことから、話し手が事態を全体的に把握しているか、部分的に把握しているかが後件述語のアスペクト形式の選択において重要であると言える。

以上のことから、事実条件を表す「たら」と「-essteni」の使用条件について、以下のように言うことができると思われる。

- (18) 事実条件を表す「たら」の使用条件：話し手が、前件の事態が起こった状況において、後件の事態を新たに認識したことを表す際に用いられるが、新たに認識した事態を開始から把握しているか否かによって後件述語のアスペクト形式が選択される。
- (19) 「-essteni」の使用条件：話し手が、前件の事態の成立がきっかけで、後件の事態を新たに認識したことを表す際に用いられるが、新たに認識した事態を全体的に把握しているか、部分的に把握しているかによって後件述語のアスペクト形式が選択される。

このような事実条件を表す「たら」と「-essteni」の使用条件の違いから、両形式の間に類似点と相違点が生起すると言えよう。

4. おわりに

本発表では、現代日本語における事実条件を表す「たら」と、現代韓国語の「-essteni」との類似点と相違点を明らかにし、両形式の使用条件を導き出すことを試みた。その結果、事実条件を表す「たら」と「-essteni」は、話し手が、前件の事態の成立がきっかけで、後件の事態を新たに認識したことを表す点では類似するが、事実条件を表す「たら」の前件は後件の事態を新たに認識した状況を表すのに対し、「-essteni」の前件は後件の事態を新たに認識したきっかけを表す点と、新たに認識した事態を後件に表す際、事実条件を表す「たら」は、話し手が事態を開始から把握しているか否かによって、後件述語のアスペクト形式が選択されるのに対し、「-essteni」は、話し手が事態を全体的に把握しているか、部分的に把握しているかによって、後件述語のアスペクト形式が選択されるという点で相違があることが明らかとなった。事実条件を表す「たら」と「-essteni」を対照分析した従来の研究は、両形式の類似点のみ注目しており、両形式の相違点についてはあまり言及がなかった。しかし類似点のみでは、両形式が全く同様の環境において用いられると捉えられる可能性がある。このような点から、本発表で明らかに

なったことは、このような問題点を解消したという点において意義があると思われる。一方、本発表では、「たら」が事実条件を表す場合に焦点を当てて「-essteni」と対照分析を行ったため、両形式が対応関係をなさない場合、代わりに用いられる形式への言及や、「たら」が仮定条件や反事実条件などを表す場合への言及はかなわなかった。これらは今後の課題としたい。

参考文献

- 有田節子 (1999) 「プロトタイプから見た日本語の条件文」『言語研究』115, 77-108, 学術雑誌目次速報データベース由来.
- 安平鎬 (2002) 「事実的用法を表す「たら」と「했더니」をめぐって」『일본학보』52, 293-303, 한국일본학회.
- 蓮沼昭子 (1993) 「「たら」と「と」の事実的用法をめぐって」, 益岡隆志 (編)『日本語の条件表現』, 73-96, くろしお出版.
- 八野友香 (2008) 「条件表現の「と」と「たら」における非仮定性について」『일어일문학연구』65, 269-287, 한국일어일문학회.
- 前田直子 (2009)『日本語の複文 条件文と原因・理由文の記述的研究』くろしお出版.
- 김선영 (Kim, 2013) 「확정조건「と」「たら」의 한국어 대응관계 분석」『언어학연구』18, 25-48, 한국언어연구학회.
- 송선애 (Song, 2006) 「기정조건표현의 한일 대조연구」『일본문화연구』17, 123-142, 동아시아일본학회.
- 송창선 (Song, 2014) 「‘-(았)더니’의 형태와 기능」『한글』306, 51-74, 한글학회.
- 이필영 (Lee, 2011) 「‘-essteni’의 통사와 의미」『어문연구』69, 61-87, 어문연구학회.

用例出典

・単行本

- 青山剛昌 (2015)『名探偵コナン 88』小学館.
- 奥田英朗 (2014)『ナオミとカナコ』幻冬舎.
- 久坂部 羊 (2006)『無痛』幻冬舎.
- 東野圭吾 (2012)『ナミヤ雑貨店の奇跡』角川書店.
- 湊 かなえ (2012)『母性』新潮社.
- 천운영 (2011)『생강』창비.
- 허영만 (2003)『식객3』김영사.

・翻訳本

- 千雲寧 (2016)『生姜』橋本智保訳, 新幹社.
- ホ・ヨンマン (2009)『食客 3』カン・スンジャ訳, 講談社.
- 구사카베요 (2016)『무통』김난주訳, 예문아카이브.
- 미나토가나에 (2013)『모성』김혜영訳, 북폴리오.
- 아오야마고쇼 (2016)『명탐정 코난 88』오경화訳, 서울문화사.
- 오쿠다히데오 (2015)『나오미와 가나코』김해용訳, 예담.
- 히가시노게이고 (2012)『나미야 잡화점의 기적』양윤옥訳, 현대문학.